

# サバティカル研修報告

## —フィンランドの高校教育—

磯部 達彦

### 1. はじめに

平成 25 年 4 月 1 日より翌 26 年 3 月 31 日までの 1 年間、サバティカル研修制度を利用してフィンランド・オーストラリア・ニュージーランドの 3 か国の高校で授業をする機会をもつことができた。フィンランドでは、日本語を教える授業と日本の歴史や文化を紹介する授業を行い、外国語としての英語の授業と演劇や木工など日本にはない教科・科目を観察した。本稿では平成 25 年 4 月 3 日から 10 月 28 日までフィンランドで行った研修について報告する。

### 2. 研修地と研修実施校

#### (1) ラハティ (Lahti)

フィンランドでの研修は、ラハティ (Lahti) にあるカンナクセン高校 (Kannaksen lukio → <https://kannaksenlukio.fi/web/>) で行った。ラハティはヘルシンキの北約 100 km のところにある人口約 10 万人の都市で、ノルディックスキーの国際大会や、毎年シベリウスフェスティバルが開催されることでも有名である。町には、スキージャンプ台、アイスホッケー・スタジアム、ラハティ交響楽団 (Sinfonia Lahti) が本拠を置くシベリウスホール、劇場、図書館などスポーツ・文化施設が充実している。

Lahti という単語はフィンランド語で「入り江」を意味し、その名のとおり町は湖畔にある。4 月初めに到着したときラハティ湾はまだ凍っており、休日には氷上でノルディックスキー、散歩、スノーボードを使ったパラセーリングをする人たち、氷に穴を開けて釣りを楽しむ人々を多く見かけた。もう雪が降ることはなかったが、町中に積もった雪はまだたくさん残っていた。スキー場もオープンしており、子供たちがシーズン最後のスキーを楽しんでいた。

ラハティに白夜はないが、5 月の終わりになると午後 11 時半ごろまで暗くならず、そして夜中の 2 時半にはもう明るくなった。夜が一番深い 1 時ごろでも空は白く、雲が紺色をしているだけだった。朝

夕に真横から差す太陽が眩しくて、サングラスなしでは目を開けていられない。6 月になるといっせいに花が咲き、短い夏に繁殖するためたくさんの鳥が鳴き始める。学校は 6・7 月が夏休みで、8 月から新年度が始まる。10 月になると紅葉は終わり落ち葉と枯れ木ばかりになり、10 月中旬には初雪が降った。

#### (2) カンナクセン高校 (Kannaksen lukio)

この高校はルター派プロテスタントの公立高校で、常勤教員と学校スタッフ合わせて 50 人ほどが勤務している。生徒数は 620 人で、生徒は 40 種類近くの中から希望する授業を選択でき、演劇やビジュアルアート・デザインなどのコースもある。また、校舎内に講堂を兼ねた小劇場があり、2014 年 8 月からは国際バカロレア (IB) コースも新設された。

フィンランドでは教員全員が大学院卒業者で、そのことに大きなプライドをもっておられるようだった。校舎内には free WiFi が設備されており、出席・成績などは各教室に設置してあるコンピュータから Wilma というインターネット・システムを使って各先生が直接入力する。Wilma は生徒へのメール連絡や掲示板としても利用されており、他の高校の先生方との連絡にも利用できる。担任制を取っており保護者面談等も実施するが、科目登録や卒業後の進路相談などは専門のスクール・カウンセラー 2 名が担当していた。授業料だけでなく昼食も無料で支給され、近くにある別の高校の授業に出席して単位取得することも可能であった。実際、私の日本語クラスにも近隣のティーリスマン高校 (Tiirismaan lukio) から 3～4 名の生徒が参加していた。彼らには Wilma を使って単位認定を行った。こちらはカンナクセン高校から徒歩で 15 分ほどの丘の上にある高校である。社会科のヘイッキ (Heikki) 先生の要請に応じて、日本の学校と学校生活の紹介授業を春期に 2 回行い、日本語の授業も 3 回行った。小・中・

高が同じ敷地内にあり、Heikki 先生の話では、英語ではそれぞれを Elementary school, Secondary school, Junior high school と呼んでおり、フィンランド語の lukio は英語にすると Junior high school で、high school という職業学校(technical school)を指すとのことだった。

### (3) lukio と technical school, 進学と就職

経済協力開発機構(OECD)による 2009 年の学習到達度調査(PISA)で、フィンランドの 15 歳の数学的リテラシー、科学的リテラシー、読解力が首位かほぼ首位と同等と評価された。このことで、フィンランドの教育は世界の注目を集めるようになった。

フィンランド大使館(東京)のウェブサイト(<http://www.finland.or.jp/Public/default.aspx?contentlan=23&culture=ja-JP>)によると、義務教育は 7 歳から 16 歳までで、終了後はほとんどの生徒が高等学校か職業学校に進学する。約半数近くが高等学校に進み、大学入学資格を取得するための国家試験を受験するということである。いずれの学校も無償で、一度就職したのち、再度大学で学ぶ人も多いようだ。

しかし、私にフィンランド語を教えてくれたマリナ(Marina)先生の話では職業学校への進学は難しいらしい。彼女によると、職業学校を卒業すれば就職のチャンスが多くあるので希望者が多く、職業学校のほうが高等学校より入学が難しい。高等学校を卒業した後は海外の大学に行きたがる生徒が多いということだった。また、午前中のフィンランド語の授業にはソマリア、中東、シリア、イラン、イラク、東欧などからの移民・難民が多く、フィンランド語の学習意欲はあまりないそうだ。というのは、高校・大学が外国人に対しても無償なので、フィンランドで学校を卒業し、それをステップにして海外へ出ようとする人が多いからということだった。アフリカ・中東からの難民がフィンランドまで来ていることも驚きだったが、無償の学校を利用して他の国へ進学するというやり方にも驚いた。

### (4) 仲のよい教員・スタッフ・生徒たち

学校では毎月、教員休憩室で先生の誕生日を祝う日があった。お茶とケーキを用意しておいてみんなでバースデーソングを歌う。また、他の学校に転勤

することになった人は休憩室にクッキーやチョコレートなどを用意しておき、みんなに自由に食べてもらうのが習慣だった。

5 月半ばに、校内の清掃やキッチンの片づけをしてきているルーリーさんの送別会が行われた。ルーリーさんは 30 年間カンナクセン高校に勤めた最古参である。教員と彼女の世話になった生徒が参加し、生徒による楽器演奏や歌、プレゼントなどで送迎した。彼女が皆に愛されていたのがよくわかる会であった。

8 月の新学期が始まる前には、丸一日かけて教育研究会を開催していた。小グループに分かれてのディスカッションを行い、その結果によって教育プログラムを立てていく。教員の話し合いによって教育方針を決めていくのは当然のことなのだが、私にはとても新鮮に見えた。

8 月 20 日は教員の well-being の日で、この日は朝から教員全員が湖畔のキャンプ場へ出かけ、健康管理の講義を受けた後、グループに分かれて運動やゲームを行った。その後は、サウナに入り、湖で泳ぎ、またサウナと水泳、最後にビュッフェ式の夕食をみんなで食べる。このようにして、ふだんはバラバラに働いているように見える教員集団の意思疎通を図っている。

## 3. 研修内容 I (4～5 月)

### (1) 2 学期末テストと 3 学期の始まり

ヘルシンキ空港から長距離バスに乗ると 1 時間半ほどでラハティのバス・ステーションに到着する。フィンランドに到着した日、ユルキ(Jyrki)校長先生がここに迎えに来てくださり、車でホームステイ先のピリヨー(Pirjo)先生の家案内してくれた。Pirjo 先生はカンナクセン高校のカウンセラーであった。

学校は 2 学期の学期末テスト中で、早速テスト監督をすることになった。1 限目の英語の試験は 8:15 から 11:00 までの 2 時間 45 分のテストで、9:45 までは全員が受験しなければならず、その後は試験を終えた者は退室してもよい。テスト問題は映画に関する語彙と長文の内容把握、冠詞の選択問題と位置を問う問題、テーマを選択してエッセイを書くなどで、かなり難しいテストである。彼らは 1 年後には大学入学資格試験に合格しなければならない。

その日の昼食時、アイノさんという日本大好き、アニメのコスプレ大好きという女子生徒に話しかけられた。彼女は6月14日からラハティで開催されるコスプレのお祭りを楽しみにしているそうだ。また、5月の母の日に、湖畔の公園であったフリーコンサートでは、出演者が「上を向いて歩こう」にフィンランド語の歌詞をつけて歌っていた。後で音楽のエリヤ(Erja)先生に尋ねたところ、これはアメリカ版の「スキヤキ・ソング」とは違って、「京都から来た女」というタイトルで、フィンランドでは有名な歌になっているそうだ。ここでは日本文化が好意的に受け入れられている。

## (2) 日本語教育

フィンランドではフィンランド語とスウェーデン語が公用語で、北方に住む先住民サーミ人の話すサーミ語は準公用語となっている。カンナクセン高校ではフィンランド語と英語が必須科目で、スウェーデン語と他のヨーロッパ言語は選択科目になっているが、日本語コースはない。しかし、先の例でもわかるように漫画やアニメ、J-POPなどの影響で日本語や日本文化に興味をもつ生徒は多い。

そこで、週に3回、日本語選択講座を開設することになった。春期(4月16日～5月23日)、秋期Ⅰ(8月13日～9月19日)、秋期Ⅱ(10月3日～10月17日)の3期構成で、春期と秋期Ⅰは同じ内容の授業を行い単位を認定した。秋期Ⅱは授業回数が少ないため、日本語学習の経験者のみ参加できる発展編にし、単位認定には至らなかった。それでも生徒たちは最後まで興味をもって参加してくれた。前述のように近隣のティーリスマン高校からも生徒がやってきた。

授業は、月・火・木の5限目(14:35～15:50)に図書室の隣にあるメディアテック(オーディオ・コンピュータールーム)で行い、ここが日本語の専用講義室になった。教室に黒板はなく、OHPとコンピュータ、プロジェクターでの授業である。講義時間が1回75分で少し長いので、授業の前半は日本語、後半は日本紹介や歴史などの調べ学習、最後にもう一度今日習った日本語のおさらいをするという手順で行った。

受講生の中には学校外で日本語を習っている生徒がおり、その生徒からオピスト(opisto)という市民

学習センターでやっている日本語教室に、話をしに来てくれないかと頼まれた。前述のフィンランド語のMarina先生とはここで知り合いになった。日本語教室のキンバレ(Kinberg)先生の要請に応じて2クラスで計6回、ゲストスピーカーとして日本語の授業に参加させてもらった。授業は高校が終わった6時半から始まり、受講生の人数は一つのクラスは20人、もう一つのクラスは4人だったが、こちらは全員が大人だった。ラハティ周辺で酪農を営んでおられる方や、日本に旅行に行った経験のある方など、いろいろなお話が伺え興味深い時間を過ごさせていただいた。2クラスを終えると9時を過ぎていた。仕事をもちながら、夜学で日本語を勉強してくれるというのはとてもうれしいことだ。

## (3) 卒業式

6月1日、卒業式は9時半に始まった。生徒によるバンド演奏・合唱・独唱の後、Jyrki 校長から一人ひとりに卒業証書と白い帽子が渡される。式後、卒業生は市内の教会に再集合する。この日は市内のすべての高校で卒業式があり、各校の卒業生がこの教会に集まってくる。先生たちで編成されたブラスバンドの演奏の後、卒業生は全員教会の前庭にあるキリスト像にバラの花を1本ずつ献花する。フィンランドのために亡くなった軍人の霊を悼むためだそうだ。教会前の大階段で市内の卒業生全員で集合写真を撮ってから解散した。

卒業式で渡されるこの白い帽子は大切な帽子で、5月1日メーデーの日、多くの人々がこの白い帽子を被って町を歩いていた。メーデーは国民の祝日で、湖畔には国旗がはためいていた。ホームステイ先のPirjo先生も、夫のKariさんも、Kariさんの友人も娘さんも、そのボーイフレンドも、全員がこの帽子を大切に保管していた。なかなか面白い習慣だ。

## (4) オーランド島 教職員組合旅行

フィンランド本土の南西沿岸部にあるオーランド諸島は自治権をもちスウェーデン色が強い。卒業式が終わると他校の先生方と合同で教職員組合の旅行があった。あなたを招待するので、フェリーの船内で日本紹介の講演をしてくれないか、と数学のマーリット(Maarit)先生から誘われ、もちろんお引き受けし、6月3日の早朝3時に、貸し切りバスで出

発した。一行は教員 23 名とガイドさんと運転手さんで、トルク(Turku)でフェリーに乗船し、朝食後の船内で先生方に 1 時間ほど日本の学校と教員の生活を紹介した。それ以外に、日本語での数字の数え方や、お箸で米粒を拾うゲームなどを行い楽しく過ごした。他の高校の先生方とも親しくなれた 2 泊 3 日の旅行だった。

#### 4. 研修内容Ⅱ(8～10月)

##### (1) 新学期

新年度は 8 月 12 日 9 時からの新入生オリエンテーションで始まった。新入生は講堂にドヤドヤと入ってきて、思い思いに床に座りこむ。その後教員の紹介があり、とくに入学式らしきものはなかった。続いて 10 時から在校生へのオリエンテーションが始まった。教頭先生がヨハネス(Johannes)先生から国語のハンナ(Hanna)先生に替わり、ヨハネス先生は普通の国語の先生に戻っていた。教頭職はよく入れ替わるようだ。本年度から IB コースが始まり、教員のうち 7 名が移動していた。

##### (2) 日本紹介授業

日本語の授業と並行して、日本紹介の授業も行った。3 学期に行った主な授業を挙げると、フィンランド語(国語)の授業で「俳句と和歌について」、現代社会科の授業で複数回に分けて「東北大地震と津波、福島原発事故などについて」、歴史の授業で「日本の中世と封建制度」、美術の授業で「日本のミニマリズムについて」、「日本の現代美術館について」など、もちろん自分ではわからないことも多くあり、京教大附属高校の同僚にメールでヒントを教えてもらったり、公立図書館の資料やインターネットを使って調べたりした。授業を依頼されたら断らないという方針で、先生方が食堂や休憩室に集まる時間には必ず顔を出して知り合いを多く作るなどの努力は怠らなかつた。

新学期にも、IB コースの生徒を対象に「芭蕉と俳句」、音楽の授業で複数回に分けて「能・狂言・歌舞伎・文楽・常磐津などの日本の舞台音楽」、フィンランド語(国語)の授業で「日本語の水に関する表現」などの授業を行い、近隣のティーリスマン高校へも出前授業に出かけた。

新入生に海外留学を勧めたいので、学年集会で新

入生 200 人に向けて海外での生活について話をしてほしいと頼まれた。留学経験をもつ生徒 8 名が 5 分ずつ自分の留学先での出来事を話し、その後、日本からやってきて現在海外生活中ということで私もスピーチをした。前日までに準備しておいたスピーチは思った以上に好評で、スピーチの後、多くの先生がよかったと言ってくれ、ハグと握手を求められた。何事もやはり準備が大切である。うれしかったが、とても疲れた。

##### (3) 1 学期末テストと研修終了

9 月 26 日から学期末テストが始まり、その間に IB コース担当の先生方はドバイで研修があるので大挙して出かけてしまった。先生方の数が減り校舎内もガランとしている。数学のヤンナ(Janna)先生の試験の監督を行った。試験のやり方は 4 月当初に行った英語の試験と同じだが、電卓と教科書の持ち込み可の試験だった。

10 月 27 日の午前 4 時にサマータイムが終わり、気づいてみるとフィンランドに来て 7 か月が過ぎていた。時間がたつのは早いもので、フィンランドでの私の研修はもう終了を迎えていた。お忙しい中、研修につき合って下さった Jyrki 校長先生をはじめ多くの先生方に感謝し、この経験を日本での教育活動に生かしていきたいと強く思った貴重な 7 か月であった。

この後いったん日本に戻り、スーツケースに新しい教材を詰め込み、オーストラリアのプリズベンへと向かった。雪の北欧から、真夏のオーストラリアへと環境は一変し、毎朝 4 時半に裏庭に飛んでくるオウムの鳴き声で起こされ、朝のジョギングでワラビーに出くわす生活になった。サバティカル後半のオーストラリア・ニュージーランドでの研修については、機会があればまたご報告したい。

(京都教育大学附属高等学校教諭)